

上村数洋, 上村八代衣, 畠山卓朗, 小島 操 (著)

頸損晩夏

—創りつづけた頸髄損傷 35 年の生活の記録—

長尾 哲男

(作業療法士)



本書は上村さんが受傷してから今までの生活活動史である。前書の『明日を創る—頸髄損傷者の生活の記録』(三輪書店, 1990) 以来創り続けた歴史でもある。随所に現れる作業療法への課題提起は、読んでいる者にとって自らの未熟さを指摘されていると肝に銘じる場面の連続でもある。

共に歩み続けた八代衣さんと、支援側にいた畠山・小島両氏との共著となっている点が、ひとの生き様を示している。誰も、一人で生きているのではなく、かかわる多くの人々との協働で生き、かつお互いに影響しあって、その人なりの固有の生活史をもっている。たまたま上村さんは障害をもっていたのだけれど、障害の有無に関係なく、誰においても自分史は自分だけで創ったのではなくて、周囲の人々との共作であり、他者に多くの影響を与えるものであることに気づかせる書だと思つづく感じさせられた。

個人的には、上村さんと初めてお会いしたのは、多分神戸での第1回のリハ工学カンファレンスの場であったかと思う。私の研究資

料の中には、フルリクライニング車いすを自分で操れるように可動操作函をつくったときの初期型に乗っていただいている状態や、家庭用エレベータにやっと乗れるという状況を示す写真が残っている。上村さんからは、この時点でも多くのアドバイスをいただいていたのだと思う。

頸髄損傷の方の社会参加には多くの例があるが、日本では多分1962年(昭和37年)に Dorothy Omori を講師として開かれた「職能療法技術者講習会」に、通訳として、その4年前に事故で C6 頸髄損傷を負った永井昌夫氏が参加したのが社会的なリハ実践の先駆的な例であろう。日本の医療関係者に頸髄損傷者支援・社会的リハ・職業リハとは何かを考えさせる大きなインパクトを与えたものであったはずである。

その講習会から始まる日本の近代リハの創生課程で育った一人として、上村さんが随所で指摘されている OT への檄に対して応えられていない現実に忸怩たる想いを強くせざるを得ない。

「そうそう長生きはしないだろ

うから好きなことをやらせたい……」と、当時発売されたばかりの高額なワープロを使わせてあげようと思った八代衣さん、それを使えるようにメーカー保証の裏をかいた畠山さんの2人の阿吽の呼吸が、実にコンピュータ発展の歴史と運命的に魔法の絨毯を織りなしている不思議さと痛快さを感じさせる。

確かに受傷という大きな壁にぶつかりはしたものの、時代と周囲の人と物を、運命的とも思える神業で手玉にとって堂々たる生活史に織り上げていった上村さんご夫婦のすばらしさが行間にあふれている……これ以上の具体的説明のしようがない書であることを感じた。

ぜひ、生活支援にかかわる多くの方々が本書に触れられることを願いたい。そのことで、また新たな絨毯が新しく織り上げられ、日本中にすばらしい絨毯が敷き詰められることを確信できる。

〔 B5 判 196 頁 1,800 円 + 税 〕
シービーアール 刊
☎ 03-5840-7561